

さらば愛しの青函連絡船羊蹄丸

停泊中の船舶での演奏

尾形 明範

筆者の船好きは、小学生の頃からの青函連絡船に始まる。これがきっかけとなって、はじめは太平洋フェリーの乗船客だった筆者がエレクトーン演奏者として乗るに至ったわけである。

青函連絡船は 1988 年に青函トンネルにその役目を譲り、就航していた八隻の連絡船は国内外に売られていった。羊蹄丸もその一隻で、お台場の船の科学館に売られていった。廃止から二十数年。はじめはすべての船の消息も分かっていたものの、海外に売却の末に行方不明になったもの、火災で焼失したもの、すでに解体されたもの、さまざまである。そんな八隻の連絡船の中で羊蹄丸はいちばん安泰と思われていた。

しかし、寝耳に水の話が入ってきた。安泰なはずの羊蹄丸が船の科学館リニューアルに伴い、展示を終了するというのである。つまり、もうお台場に展示はできない、言い換えればこの先どうなるか分からない、であり、もう会えないかもしれない、である。それを聞いたのは、2011.7、もうあとふた月で展示終了というところであった。



写真・閉館まであと一週間の羊蹄丸 2011.9.23

もう、いてもたってもいられなかった。このままなにもなしに、さよならなどできない。1988.9.18、臨時運行の最終便羊蹄丸を十和田丸から見送ってお別れしたが、いまこうして再会できている。なのに、またお別れか?!筆者は本船がお台場に展示されたときの一番乗りのお客であり、どうしても最後に自分なりのお別れをさせてほしいと、その一心で船の科学館に連絡を

とった。いきなり直接交渉である。運搬費は自費、ギャラもいない。「さようなら羊蹄丸ライブ」はこうして企画された。

今回、基本は海に囚んだ曲を演奏する、ということが入ったため、いつものようなリズムものやジャズばかりをセレクトして弾くのは異なる。



写真・一等航海士の服装で演奏する筆者(東京新聞掲載記事)

話が通ればあとは早い。今回の主役は羊蹄丸であるが、ありきたりでは終わらせない。これが筆者のやり方である。函館の女、海峡、雪國、涙の連絡船、土曜ワイド劇場船長シリーズのテーマ、ある甲板長の退職のオープニングテーマ、津軽海峡冬景色をメドレーでひとまとめにした。演奏時間、13分。失敗したらもう一度最初からというところでもないアレンジであった(後述する新居浜での「ありがとうさようなら羊蹄丸ライブ」ではこれに、海に降る雪、心和む連絡船、連絡船の唄、函館イカ踊り、ねぶた囃子、ある甲板長の退職の中間テーマの六曲をプラスし、計 13 曲、演奏時間 20 分のメドレーに仕上げている)。

9月23~25日(当初は二日間のみであったが追加で一日)、ライブを行うこととなった。

エレクトーンは自宅から ELX1 を業者により運搬してもらった。お台場時代の羊蹄丸は、エレベーターがきちんと機能しており、岸壁から本船に運ぶにいたっては特に問題があったとはきいていない。

どこで演奏するか、も大きな課題であった。いろいろ案は出たが(旧・自動車デッキ、旧・車両甲板、操舵室、ほか)、電源確保、人の流れ、さまざま考慮の上、右舷側のラウンジに決定した(旧・グリーン船室)。椅子、テーブルなど充実していてゆっくりと演奏を聴いてもらうには申し分なく、ほかにこの区画でイベントをやっていないので大音量を出しても迷惑がかからない(演奏中のボリュームは最大より少し絞った程度でちょうど良かった。船の天井は低いので、音がそれほど逃げていかない)。

トークもいつも以上に力を入れた。青函連絡船のネタはいくら話しても尽きることがない。ライブでは総じてトークのほうが演奏時間より長くなってしまった筆者であるが、今回はそれに輪をかけたかたちとなった。



写真・連絡船トークが長くなる筆者

ちょっとした小ネタも披露した。連絡船は全船で汽笛の音色が異なっているが、客船九隻の汽笛の音色を再現してみたのである。もっとも、同じ船でもコンディションで若干音色に変動がある場合も少なくないが、もっともその船らしい汽笛を再現した。

今回のライブは、いつもお世話になっている羊蹄丸ボランティアの大神隆氏より、青函連絡船時代に実際に使用されていた一等航海士の上着と帽子をお借りし、「さようなら羊蹄丸メドレー」でのみ、これを着用して演奏した。本当は通して着用しようと試みたが、九月下旬とはいえあまりの暑さに耐え切れなかった。

このときの模様は東京新聞に写真つきで掲載され、「響く別れの調べ連絡船羊蹄丸・川崎の会社員ライブ演奏」として、東京版、神奈川版に載った。

三日間で318名の方に演奏を聴いていただいた。これをもってライブはすべて終了のはずだったが、実

はおまけがある。楽器の搬出は業者との調整があり、すぐには行わなかったため、9月30日の船の科学館のフィナーレの際、おまけで二曲だけ演奏した。このとき聞きにきたのは模擬出航など、イベントのボランティアとして来ていた元連絡船乗組員の方々であった。



写真・新居浜東港に係留中の羊蹄丸

お台場にて展示を終了した羊蹄丸に次の行き先が決まった。とはいえ、もう二度と姿を見ることのできないものであった。国内のシブプリサイクルに関する団体に譲渡されたのである。しかし、若干の猶予があった。約二ヶ月、新居浜にて一般公開するというのである。しかし、もっともそのあとは解体の運命になる。

もう、最期になる。お台場時代からの羊蹄丸ガイドボランティアのメンバーと共に、新居浜に行くことになった。筆者も羊蹄丸ガイドボランティアメンバーの一員として新居浜に出向いた。演奏以外は、飾り毛布の手伝い、船内の案内、いろいろやる。

さて、今回のエレクトーン、さすがに自宅から新居浜へ運ぶのは無理がある。ここは、新居浜のヤマハにお願いすることとなった。ELS-01Cを二台借りることとなった。一台が船内用、一台が屋外ステージ用である。今回はお台場時代と違い、舷門にかかっている仮設のタラップ以外では本船に入れない。ただですら重いエレクトーン、階段をなんども上り下りして移動させるべきものではない。後から聞いたら、大人六名がかりでやっと船内に入れたという。たいへんなことをさせてしまったようで、申し訳なかった。

演奏場所は前回と同じにしたものの、お台場のときとは違い、同じフロアに他のイベントがはいっていたりする関係で、時間を調整しながら進めなくなはならなかった。ほんの30分遅れてもいけなかった。

そんな中、前述の新居浜専用 20 分メドレーを演奏した。

また、今回は「もし青函連絡船と宇高連絡船がすれ違ったらどうなるか」を再現した。宇高連絡船の汽笛を筆者は知らなかったため、音源は宇高連絡船愛好會會長の三村卓也氏にご協力いただいた。

グランドフィナーレは野外で行った。羊蹄丸ガイドボランティアチームの出航模擬の後、エレクトーンで羊蹄丸の汽笛を「鳴らし」、弾いたのは連絡船が出航時に流していた「別れのワルツ」である。羊蹄丸をステージ前方に見ながら、僚船の連絡船八隻とタグボートの汽笛を同時に流した(汽笛部分は打ち込み)。いくら再現とはいえ、羊蹄丸には昔、苦楽を共にした僚船の汽笛が聞こえただろうか。今は遠い記憶の彼方のみには存在しない仲間の声だ。



写真・グランドフィナーレ「別れのワルツ」のあとに、歌手の岡雅子さんと「蛍の光」

二ヶ月で来場者五万人強。一般公開が終わった羊蹄丸はほどなく多度津に回航され、その生涯を閉じた。

その年の大晦日、つまり羊蹄丸とお別れをしてから半年後、青森港に停泊している八甲田丸でもエレクトーンライブを行うことにした。もっとも筆者単独ということではなく、八甲田丸のカウントダウンイベントライブのなかの一組としての参加である。

船内でリハーサルをしていると、海の穏やかなお台場や新居浜とは違いそこは真冬の青森、停泊しながらも常に揺れている。時折、船体が軋む音が聞こえる。船内を一周すると、羊蹄丸に展示されていた、遺品の「青函ワールド(昭和 30 年代の青森をテーマとしたジオラマ)」が飾られている。人形たちの会話のやり取りを聞いていると、ここはお台場の羊蹄丸だったのではないかという錯覚さえ感じる。

羊蹄丸とはいったいなんなのか。それは各々の心に深く刻まれた記憶そのものなのかもしれない。



写真・八甲田丸カウントダウン、ライブ会場にて

(敬称略/順不同)

「ありがとう羊蹄丸ライブ」

主催)財団法人 日本海事科学振興財団

協力)杉嶋貴司(船の科学館)

MJ ピアノ

根崎亜希子

西沢弘二 大神隆 吉田孝志 上杉恵 谷尾誠

(羊蹄丸ガイドボランティア)

「ありがとうさようなら羊蹄丸ライブ」

主催)新居浜市市制施行 75 周年記念

新居浜高専創立 50 周年記念

羊蹄丸一般公開事業実行委員会

協力)えひめ東予シブプリサイクル研究会

日野孝紀

難波江任

岡雅子

三村卓也(宇高連絡船愛好會)

ヤマハミュージッククリテイング新居浜センター

「カウントダウン八甲田丸ライブ 2012」

主催)NPO 法人あおもりみなとクラブ

協力)田村隆文(八甲田丸)

株式会社東京堂青森センター

ねぶた運送有限会社

(エレクトーン奏者 おがた あきのり)